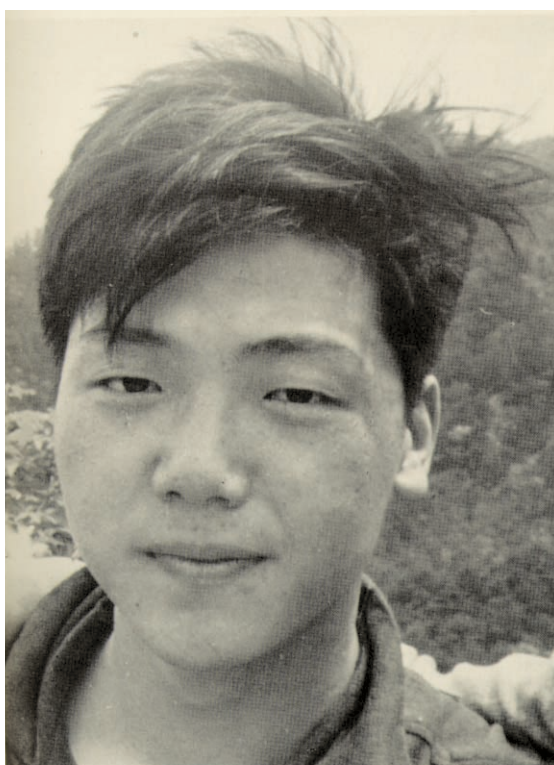


「泉 の 山」



OGAC関西会報



さみしくも

岩場のかげに若桜

散りて身にしむ

友のなさに



来ました。行くまうは三人夢ふくらまて
 行きました。丁度天気も順で、唐松小屋
 では大雨で夜中ぬれぬのうたやうです。切角
 来たに、いらくと考へて、一晩に
 雨止んだか小屋の人に危ないから止めるよう
 にと言われ、キレトまうに、一晩つきました。
 初めは現物のリレーを写して来ると張切つて
 行きました。駄目に成り、其つて、唐松岳の頂
 上は暗水、所収も記念写真と撮つてきました
 思つても、いふか、唐松の山へ急に討つて
 行く事に成り、何かぐんぐん走り寄せられ
 行つたやうな気がする。これでも、あつた気が
 衆に成つた」と言つています。

前略所見下まで。
 今年はお順な天候が続いて休も要調子で
 暑い日の続きだかと思へば、今日は雨の中に丹れ
 ば肌寒く感じます。
 今日はお手紙ありかとうござります。
 山岳部も皆おはすつたので、所々妙極く申し
 たい思つてあります。此度お集りして、修
 復をして下さる事、あのうござります。
 所々感さかり誠に申し訳りござります。
 私一人に成ります。又、おええお集り
 あります。先日、白内障の手術をして、
 また眼鏡が必要で、おつたります。
 まう、お天婦と、お三人で、お山へ行つて

七月十五日
 由良薫村
 村上東樹枝
 私の心持少し、でも役に立って下つたまで

泉でも三男が八月一日に結婚式を致します。
 夏、泉に思ひますが、長せなや、次せが、丁月
 新也すうて（決まうて）回金も、是非にと
 言われ、急に式をあげ、事に成りました。
 皆お集り、此の機会、お集りに寄つて頂きたり
 と思つたが、九州からあせで、姉妹が、
 下で、二三日おく、行く事に成つて、
 急ぐで、何のあつても、まう、
 一申し訳りござります。あ、かろす。皆、
 には、よろしくお集り下つたまで。本日は残念です
 が、お集り下つたまで。
 まう、お集り下つたまで、お集り下つたまで
 下つたまで。



遭難碑到着 於第3ケルン 1965.09.01
 後列左より：村上忠、村上明義（兄上）、宮本氏、小永井、坂東、中本、保野
 前列左より：村上英夫、村上東樹枝（御母堂）、畠中部長、百瀬、村上勉

創刊の辞

西 川 毅

ほんまに、よろしおました。OGAC関西（大阪外国語大学山岳会・関西支部）がでて、その上この度は会報を創刊することができました。OGAC関西つくったのは去年六月でしたな。以来、三ヶ月ごと山を肴に酒を酌みかわして、今夏（平成10年）八月一日、信州は唐松小屋に十数人集うことができました。

この「唐松山行」へのいざないは、昭和三十七年不帰二峰で天上の人となった村上泉君の遭難碑を修理して、追悼しょやないか、ということで実現しましたんです。遭難碑の修理作業してくれはった宮崎洋、保野昭、中本公博のお三方、ほんまご苦労さんなことでした。

一日は土曜で、小屋はえらい混どりました。ぎゅうぎゅう詰めで思い出しました。あれは昭和の三十三年でしたかなあ、もう四十年前。戦後の山岳部がでて二年目、初めて穂高連峰への山行やったんです。高山から槍平→飛騨乗越→槍→穂高縦走→岳沢のコースでの奥穂の小屋。やっぱり夏の盛りで超満員。あんたは奥穂の方を向いて、あんたは北穂、横向きでしかも頭と足と互い違いやてえ。一緒やった加藤（多嘉志）と村上（十川博美＝平成11年病没）も、こらかなわん。幸いシュラフ持ちやったんで、頼んで三人特別に食堂のテーブルに寝さしてもらたんです。

それでも唐松小屋での一夜、ほんによかったですなあ。酒が入って一気に若かりし頃へ。集まったメンメン、四



十代から還暦過ぎまで、みな歳なんか忘れて盛り上がったりしました。いやーっ、ほんま、ええもんでした。あの共有できた時間、なにものにも代え難いひと時やったと、みんな思うてる。

会報も、は

じめは村上泉君の「追悼文集&写真」という話しやったのが、せっかくやから「会報」にしようやないか、ということで創刊号ができました。編集のプロ保野さんとデザインのプロ船井総一さんのお二方には大きな力をかしていただきましたこと、関西支部のメンバーになりかわりまして「ありがとさん」をいわせてもらいます。

山はええワ。ひと言でいうたら、こうなるのとかやいますか。なんでええのんや、いわれて、こういうしかないんとかやろか。山へいったらなんでもあるやん、と。それに、天に一番近いしなあ。そやから皆いくねん。

(98/08/28)

*
**

OGAC誕生の経緯

とにかくいっぺん集まろ、ということで十人ばかりが山を肴にガヤガヤ一杯やったのがOGAC関西のスタート（平成9年6月13日）やったんですけど、経緯をちょっとしたためておきます。

西前四郎君が急逝されたのは平成八年の十月十日ときいてますけど、その年の春に加藤、西前、垣内秀朗に声をかけてホテル阪神の「ドンク」で、歳もとったことやし健康のためにもそのへんの山歩きしたらどやろ、ともちかけたんです。西前は山歩きより手始めにいっぺん忘年会でもして集まる方がええのやないか、という意見。それもそやなということで、山岳部員の名簿の話になり、広瀬州男がもってることがわかった。

それから広瀬と二、三回会いどうこうしているうちに、西前は初会合をみることなく亡くなってしまった。その後、広瀬に関東との連絡の労をとってもらい、坂田愼との連携で平成九年四月二十六日、大町市の高橋洵の工場に集まることができました。

「泉の山」

村上君の追悼山行に参加して

加藤 多嘉志

不帰ノ陰の最低鞍部で昼食をとり、同行の西川君と鎖場に取り付いた時、迎えに来てくれた中本君の声がした。地獄に仏とばかり、彼のサポートで岩場を登っていき、暫くして彼のエールに答える声がした。宮崎、保野の両



君が遭難碑を守るようにして待っていた。遭難碑は、先発組の彼らによって立派に修復され、丁重にもビニールで被われていた。

この日の不帰の峰々は、どんよりとした曇り空で、鋭い岩峰や深い谷は静寂の

中、恐ろしいほどの緊迫感が漂い、私を圧倒していた。これまでの山行で初めての体験であった。遭難者の霊を弔う山男の永遠の友情が、あたりを神聖な舞台に仕立てあげていたのかも知れない。

彼らの労をねぎらったあと、一同で黙祷を捧げていると、村上君の霊が不帰の岩峰に甦り、「皆さん、いつまでも僕のことを思ってくれてありがとう」という声が今にも聞こえてくるようであった。暖かい友情に包まれて、彼は本当に幸せな男だと思った。

遭難碑に別れを告げて、唐松岳山頂へ着くと、そこはいつものように、登山者の楽しげな声で満ちていた。私も別世界から舞い戻ったように緊張感から解き放たれ、唐松小屋で待っていた諸兄達と出会う頃には、すっかり陽気になっていた。

その夜の山小屋では、遭難碑の修復が無事終わったこともあり、仲間の顔には、達成感と安堵の表情が浮かんでいた。

ところで、私は生前の村上君を知らない。社会人にな

って間もなく、新聞紙上で大阪外大生遭難の記事を読み、それが彼であることがあとで判ったのである。

今回の追悼山行は、遡れば、一昨年亡くなった西前君が源流といえる。西前君とは生前、西川、垣内両君と集い、関西在住の連中と山行を楽しもうと話していた矢先の突然死であった。

そのあと、有志諸君の尽力でOGAC関西が発足し、以後、3ヶ月毎の例会、後輩の諸兄にサポートされての山行を重ね、昨年10月の遭難碑の確認山行、そして今夏の追悼山行への参加となった次第である。

ともあれ、私にとっては、感動的で、心に残る山行であった。

合 掌

50キロのセメント袋

宮崎 洋

村上泉君が亡くなって、早くも三十余年たちました。ご母様はじめご家族の皆様の悲しみは、今も癒えることがないものと拝察申し上げます。本当に残念なことでした。

遭難の連絡が入った時、私は奈良・和歌山県境（十津川村）の小学校で臨時講師をしていました。50名の子どもを校長と二人でみていたものですから、「休みをください」とはなかなか言いだせず、結局不参加ということになってしまいました。やがて「遭難碑を建立するぞ」という手紙がきたので、その年の夏も終わろうとする頃、八方尾根へ急行しました。



暗くなってやっと唐松岳のカマボコ型テントにたどり着いたところ、「セメント袋がケーブル駅にある。誰かとりに行きたい者はいるか」ということだったので、私は板東君（のような気がする）と阪本（中本）君ともに志願し、今登ってきたばかりの道を下りました。ケーブル終点には、確かにセメント一袋が届いていました。それを背負子にくくりつけて、「ヨッコラショ！」と担ごうとしたところ、その重いことといたらありません。それでもやっと立ち上がって歩き出すと、背骨がひんまがりギシギシ音がしそでした。それにトラップが肩に食い込んで痛くてたまりません。それでも三人で交代しながら、なんとか夜明け近く唐松小屋へ運びこみました。

それから幾十年の歳月が流れたわけですが、阪本君に会うとよくその時の話になります。「あの時は重かったなあ。いったい何キロあってんやろ」、「50キロですよ、一袋50キロのやつ！」

今年の遭難碑補修山行は、日程フルに参加できました。碑にはサンドペーパーをかけて、防腐液を丁寧にぬり、時間を十分かけて指示書のとおりに作業しました。材質が良いこともあり、これから先長年月保つものと思います。ただし、上部の岩にひびがはいっているので、それが碑の上に崩れ落ちてこないようにする必要があります。その作業は、保野・阪本両君と共に来夏行うつもりです。参加できる方はまたよろしくお願いします。

今回の補修材料・道具一式は、荒川君よりご寄贈いただきました。氏はその方面の専門家でもあり、いただいたものは状況にピッタリあっていました。本当にありがとうございました。

紙数が尽きようとしています。村上君のご冥福を心よりお祈りしながら、筆をおきます。

「せつないね」

由良 薫

5年程前から経済企画庁が発表している「豊かさ指標」が、平成10年度は民間のシンクタンク・三菱総合研究所のそれと大幅に違って波紋を呼んだ。5月に発表された経企庁のトップは福井県で、石川、長野、山梨、富山と続き、最下位は埼玉。一方、三菱総研は10月の発表で、トップが長野。2位以下は宮城、岡山、広島…で、最下位は高知。三菱の場合、持ち家比率や児童福祉施設数、病院のベッド数などといった客観データに、住民のアンケートに基づく「満足度」という主観的要素を加えたため、結果に違いが出た。



にもかかわらず、長野県だけは官民両調査で極めて高い評価を受けている。しかも、自分の住む土地を「どこよりも良いところだと思う」素直な気持ちが、トップに躍進させた主因だというのだから小気味良い。長野人の高々とした気分が伝わってくる。

長野に住んだことはないが、学生時代から何度か訪れて実にいい気分にしてもらったことが一再ならずある。昭和38年の夏、白馬岳の入山口・猿倉で大阪からやって来るはずの友人を待っていた時のこと。2日待っても姿を見せず、食料も底をつき、友人の懐を当てにしていたのだから全くの文なし。仕方なく信濃四谷（現白馬）駅へ向かって歩き出した。空腹で2時間も歩いたらフラフラ。道路脇の飯場へ入り込んで「水を飲ませてください」と声をかけた。30台半ばの女性が見かねて青い小さなリンゴを2個手渡してくれた。「これを食べて、これに乗って。無茶はあかんよ」とトラックの荷台へ押し込んでくれた。リンゴの味と、麦わら帽子の下笑顔が忘れられない。

同じ年の冬、薪運びのアルバイトをした遠見小屋のおじさん。氷の張った桶から出して野沢菜切ってくれた無骨な手も目の前に浮かぶ。

「せつないね」。遭難事故を起こした後のことには違いないが、何時、どこでだったかどうしても思い出せない。泉君のお母さん、東梅枝さんがおっしゃった一言が、響きとしてではなく、雰囲気として熱く胸の底に残っている。ことば自体は標準語だろうが、気分として私の中で生きているのは、まぎれもない信州弁。ことばの向こうに紫の山脈が広がり、暖かさと優しさが重なって、また胸を熱くする。そのまた向こうに泉君の赤い頬と、どちらの目だったか、まぶたの下小さな傷あとがかいま見える。この夏訪れた八方尾根の高山植物はことのほか見事だったが、その場に立たなくても、たった一言の、本当の信州弁^{かせ}だけで、自分でも驚くほど素直な空気にひたれる。こんな風を味わえる幸せをかみしめている。

豊かさ指数をあれこれ言うのは、何ほどの意味もなか

ろうが、長野がトップだったことだけはうれしかった。ちなみに大阪は45位と39位、京都は27位と45位。そんなものかもしれない。(平成10年6月)

唐松山行

小永井 征也

久方振りに訪れた白馬の地には、今年ずっと続いている不順な天候のせいもあって、夏らしからぬ、雲の低くたれ込めた景観が広がっていた。三十年あまり前、不帰ノ険に立てるべく新調した道標（それは当時、私にとっては亡き村上君の墓標そのものだった）を背負ってのぼって以来の入山だった。文字通り久方振りの山行で色々な思いの去来する中を歩き始めた私にとっては、この天候の方が相応しかったのかも知れない。

大学を卒業してずいぶん長い時間が経過した。在学中は結構好きなことを好きなようにやって、貧乏とはいえかなり充実した満足出来る生活を送ったと、今も思っている。印度労働運動史の研究は私にとっては、卒業以後継続しなかったといううらみはあるにせよ、人生の中でも最も輝く部分であり、深い充足感と共に残っている。あまり金にならない分野の資料文献は、実業の都大阪には殆どなかったが、当時独立後の極貧にあえぐインドについても例外ではなく、全くなかった。時折天牛書店で年に2〜3冊も発見出来れば御の字という有様だった。従って一年の内、何回か東京の神田小川町から神保町にかけての古本屋街を朝から晩まで、それこそ昼はラーメン一杯で何日も歩き回って、資料文献を漁って歩いた。友人の下宿にころがり込んでの居候だったし、往復の電車賃（確か当時、学割を使って片道大阪〜東京間のつばめ型電車特急で6時間、3000円位と記憶しているが）を浮かす為に知合いの通転手に頼み込んで、東京〜大阪の長距離トラックに乗せてもらい、タダで往復していた。本人はそれなりに真剣だったし、まわりもそれを認めて応援してくれていた。

卒業の年、大学祭でヒンディー語による——今にして思えばあまりに青くさい——語劇「破談」の演出をしたり、その前座で今でいうDJ風にインド音楽を紹介したり（これには、冒頭でのインド国歌を流す前に観客に起立を云わなかった為、外国人を除く殆どの日本人が着席のまま雑談を続けたのであとでエライお目玉をくらうというオマケまでついてしまったのだが）と結構好き勝手な学生生活で、それはそれなりに満足出来るものだった。

しかし、これと同等以上の価値をもっていたのが山岳

部での生活であった。あまりに色々なことをやっていたので、一年中べったりの山行と云う訳にはいかず、その意味では決して山行出席率の良い部員とは云えなかった。ただその関係の濃密さは、他の学生仲間とのそれとは全く異質で比較にもならず、何ものにまして得がたいものだった。大阪の地で一人で新たな生活を始めた私にとって、同期の板東君、村上君を始め、先輩後輩たちとの山での、また里での交遊は何ものにもかえ難く貴重だった。そして、それは今も変わらず流れ続けている。

その年の春行われた大学の健康診断で、私は十二指腸潰瘍の疑いを指摘され、精密検査を受けるよう指示された。当時すでに決まっていた山行をとりやめ、私のかわりに村上君が新たにメンバーに加わった。「誤診」と云う朗報と共に大阪に帰った私を待っていたのは、村上君の死という衝撃的なニュースだった。しかも知らなかったとはいえ、私は病院でのうのうと暮らし、救援にも行ってやれなかったのだ。もしメンバーを交替しなければ……、せめて現地へ救出に行けでもしていたら……。これは今も私の心の中に澱の様に存在している。不帰ノ険に立つ道標は、今も私にとっては村上君の墓標なのだ。こう云った一人よがりの決めつけは、人にとっては迷惑なこともあるかも知れない。しかし、あえてそれもお許しいただきたい。

やがて村上君の死から数年後、同期の板東君も不慮の死を遂げ、三人の内私一人が生き永らえることとなった。三人で酌み交わした酒の旨さも、語り合った会話の暖かさも、今なお心の中に生きている。彼等二人の死が、シーンをそこで停止させ、それ以上風化させないでいる。いつか将来私が彼等と再会した時に、このシーンは再び動き始めるのだらうと思っている。

八月一日、皆で集結した唐松小屋は、夜になって夏とは思えない程激しい風雨に襲われた。咆哮にも似た風の音、車軸を流す様な雨足をききながら、来し方に思いを馳せて感無量であった。



30年ぶりの唐松

高瀬 英彦

村上さんはフランス語科の1年先輩になります。山を知らなかった私に、山の厳しさと山の素晴らしさと山の暖かさを教えて下さいました。学生の頃、何度か山行にご一緒した折、あの低音のよく響く声で、兄のようにやさしくアドバイスをし、導いて下さったことが忘れられません。

1998年8月1日、約30年振りに唐松に登りました。「村上さんの近く」にまでしか行けませんでした。とにかく唐松山荘に集合できました。忙しさを口実に30年近く山から遠ざかっていた私に唐松山行を決心させたのは、OB諸先輩のおさそいがあったのですが、やはり村上さんの近くに行きたいという思いがあったからだと思います。十分な装備もせず、久しぶりに「ちくま」

にゆられての山行はなつかしく、心はやるものでした。

昔ご一緒した保野、中本、荒川、林諸先輩、山大好きの大先輩、OBの方々と、当日山で一夜を過ごすことができました。これも、村上先輩のお招きだったような気がします。

これからは折をみて自分なりの山行を再開し、泉先輩を偲びたいと思います。

最後になりましたが、下山時に不注意から怪我をしてご迷惑をかけましたこと、この紙面をかりて皆様にお詫び申し上げます。



唐松岳から槍穂を望む



修復を終わって

泉よ お前の赫い頬つべ それは僕らの太陽だった 思えば愉しい日々だった 思い煩う過去もなく と胸つかれる明日もなく	泉よ お前の赫い頬つべ それは僕らの青春だった 思えば帰らぬ日々だった 今に忘れぬ季節 とき だった
---	--



遭難碑ふたび



補修の合間



碑の前にザックを下ろす



ここを込めて



碑とともに



「修理中」



レリーフに見参



唐松小屋の夕



想いを込めて



唐松小屋の夜



下山時

記 録

比良八荒をめぐる——遭難と報道

「冬の比良に一人で登るなんて。私でも、冬は搜索の時以外登りません」。比良の「道先案内人」が疲れののにじんだ口調で話した。「なぜこんな時季に一人で…」と、残念そうな顔の陰にいら立ちがのぞいた。

今月十三日、比良山系の武奈ヶ岳に一人で登ったと見られる神戸市の男性が行方不明になる遭難事故があった。現在もまだ発見されていない。搜索は、堅田署内で「道先案内人」と呼ばれる地域課の入江義春係長（51）が指揮した。昨年、同署が計11回、比良に救助隊を送った際も、いつも先頭に立ち山中に入った。

標高千メートル程度の山が連なる比良山系は京阪神から近く、軽装備で気軽に登る登山者が多い。しかし、琵琶湖から吹き上げる気流の変化が激しく、よく天候が急変する。冬は頂上付近の積雪が4メートルに達することもある。入江係長は「ふもとの駅に雪がなく、冬の比良の厳しさを実感できない人が多いようだ」と話す。

雪で覆われた冬山の搜索は、地形など「道先案内人」が経験で得た知識が頼りだ。雪に足を取られ、搜索範囲も大幅に狭まる。

近年、中高年の登山人気の高まりにあわせ、山の事故が増えている。そのたびに指摘されるのが、山や自然に対する認識の甘さだ。比良山系では、入山時に提出を求められている登山者カードを出さない人が多く、遭難した際、登山ルートが特定できず搜索が難航する。今回の男性もカードを提出していなかった。

入江係長がつぶやいた。「私の子供のころはよく山で遊び、ひとりで山の怖さを知ったものだが」。なぜ、そういう怖さを忘れてしまうのだろうか。便利すぎる生活の中で、自然とじかに接する機会が減ったからかもしれない。「道先案内人」は「最近の子供たちは、自然の怖さを全く知らないんじゃないだろうか」と気遣った。

保野 昭 様

99/03/05

今日は4月中旬の陽気だったため、仕事中心とうとうしました。禁じられた眠りの甘美なことといったら、文字どおり無我夢中というか、恍惚とした感じがしますね。

さて、新聞記事の切り抜きをお送りします。

①は京都新聞です。蓮川に言ってやってくれたまえ。

「中高年登山愛好者の認識の甘さは確かにある。保野・中本といっても必ず道に迷う。今後、比良山系で遭難者を出さないためには、過去に30年ほど遡り、何時、何処でどのような状況の下で遭難死したのか、特集を組んでもらいたい。過去10年ほどは起きていないが、それ以前は比良八荒との関連で事故があった。比良八荒も近いことだから、大急ぎでやってもらいたい。中高年登山者は、具体例を知ってはじめて認識の甘さを改めるであろう」

宮崎 洋

蓮川 大兄

99/03/22

昨日の新聞で、例の行方不明者が武奈ヶ岳の沢筋で発見された由、実は宮崎氏からこれについてのコメントを頂戴しておりましたから、遅れ馳せながら仲介させていただきます。

氏とは丁度2日前の11日に同じ道を辿ったのですが、その途中、西南稜にかかる辺りで吹雪のためにルートを見失い、沢に向かって半時もの無駄足を踏みみました。結局磁石を確かめて登り直したのですが、氏の口から雪崩の心配が飛び出したほどの急勾配、そこに無駄な踏み跡をつけたわけで、あるいはと云う気持を拭いかねる次第です。

保野生

保野 昭 様

99/03/25

先日、宮崎さんからの転送文などFAXを頂きました。

この遭難の件は、2月13日、雲ヶ瀬山山行の際、その2日前に宮崎さんと武奈ヶ岳に登られた状況を、少し聞いていました。その後、1月以上を経過して、この3月21日午後、遺体が発見されたと報道されたのは、ご承知のところですよ。

宮崎さんが転送された京都新聞のコラム「点」——表題『道先案内人』——（2月24日付け）は、当社の滋賀本社の警察担当の小池直弘記者が、署名入りで書いたもの。私も、既に読んでおりました。

そちらからのFAXを受信したあと、24日夜、小池記者に連絡し、遺体発見の状況など、聞いてみました。彼は山に詳しいことはありませんので、詳細までは分から

ないようですが、発見されたのは、登山道から大きく外れたところで、沢に近く、相当に深く雪の積もっていたと思われるところだったという。1、2時間は登山口から登ったところで、3、40分で行けるほどの近場ではないといえます。

その上、遭難した神戸の運転手（53）は、登山数回に過ぎない、ずぶの素人といえるほど。服そう、装備、食料など、およそ冬山に登れる状況ではなかったとも言います。

また、遭難直後の捜索では、当時、比良山の降雪が続く、雪道の踏み跡が消えていて、これを容易に探し出せない状況でもあり、結局は探し出せず、捜索を中断していた次第です。

一方では、その遭難のあとも、割と比良山に登る人が見かけられたと、小池記者は観測していますが、その中には、雪がきれいなので見物に、と言うくらいの気軽な人がかなり交じっていた、とも指摘していました。

雪山のすぐ近くにアプローチできるようになっている、交通環境の変化は否めません。雪山が、多くの人にとり、手近になり、目の前に近づいてしまっているようです。

以前のように、山や自然についての十分な認識を求める必要性が、あるいは一層強くなっているのかもしれない。

宮崎さんのご心配の意向は、担当の記者には伝えておきました。

取りあえずは比良山遭難関連についてのご連絡まで。
以上。 蓮川 博凡

保野 哲人 様

99/03/25

奈良二月堂のお水取りも終わったというのに、急に寒くなってきましたね。比良スキー場の積雪は50cmから70cmに回復しましたが、春の歩みの速さには追いつけないようです。

さて、例の遭難した神戸市の男性については、「坊村町の口ノ深谷の沢付近で遺体で見つかった。堅田署の調べでは凍死らしい（読売）」、「坊村町の比良山登山道から約300メートル下の沢で見つかった。堅田署では登山道から滑落したと見ている。捜索を兼ねて登山していた神戸勤労者山岳会のメンバーが遺体を発見した（毎日）」などと、各紙奈良版は伝えています。

遭難の状況がこのとおりだとすると、ゴテンヤマコースをたどり1107mピークに達するまでの間、つまり積雪のためやや痩せ尾根状になっており左側に電線が見え

ていた辺り、「どこへ引いている電線かなあ」と我々は不思議に思ったはず。お送りいただいた写真にも電線がうつっています。要するにその辺りで右手の沢に転落したものと思います。我々が踏み迷った地点ではなかったと考えられます。

我々の通常の「気ばらし」（哲学ではなんとも思い入れの深い概念かと思いますが、フランス語でなんというのか知りたいところです）行動とは、何の因果関係もなかったことが判明し、良心の呵責から自由になった訳です。あとは、彼の冥福を祈るばかりです。

今年の比良八荒はどんな形で現れたのか、これから現れるのか、興味のあるところです。日付不明の毎日新聞によれば、強風が原因で列車横転事故がたびたび起こる北小松―蓬萊間（9.6キロ）では風速20メートルを記録した場合、列車を一切乗り入れないという全国一厳しい規制を導入したということです。「平成8年6月29日未明、台風通過後の強風のため比良駅に退避していた貨物列車（20両編成）のコンテナ車3両が横転した。JR総研は、最大風速57メートルに達した可能性がある」と分析した。ということは、比良八荒は春先に限らないということです。十数年前から気がついていましたが、琵琶湖上空だけポッカリ青空が見えることが多い。つまり、湖水は周りの陸地より暖かいのでそこだけ上昇気流ができる。だから気圧も低くなっているはずだ。従って日本列島東沿岸を低気圧が通過すると、比良山付近は強風がよけいに吹きやすいのではないかと推理します。

ともあれ、河北とか蓮川などが新聞人としての自覚を持っていれば「比良山と中高年登山者」を記事にするとするのですが、それらしい気配がないのはどういうことか。ムラカミの靴を買わせたら、自覚も高まると思いますが、貴兄はどう判断しますか。

最後になりましたが、今回も思い出深い山行写真をたくさんお送りいただいて、本当にありがとうございます。我が人生最良の部分の懐かしい思い出となるはずの写真です。心よりお礼申し上げます。

今週末の日帰り山行を楽しみにしています。尊師をぜひ説得してください。

敬 具

宮崎 洋

宮崎 岳兄

99/03/25

思いがけず長文のFAX拝受、大兄の面目躍如たる文面に三嘆の思いを深くしました。

朝日の如何にもお座成りの、ブンヤ魂の欠けらもない伝聞記事に対して、より直截なデータをお示し頂き、わ

れわれの嫌疑が晴れたのは何よりです。

それにしても、事故とは本当に何気ないところで起こるものなのですね、かねて大兄の親炙される、兼好法師の説くごとく。

比良八荒についての積年のご考察、これまた膝を打つところですが、テレビのワイドショーに発現する通り、世は挙げて＜現象＞の波に漂うばかり、悲しいかな、その淵源には恬として風馬牛が偽らぬ現状です。真という言葉の、廃語となって何ぞかく久しき！

事のついでながら、かく云う小生は＜秋成イチス＞のひとり、所詮は虚無のこの浮き世、せめて己が信念の実をこそ、心の拠り所とはする次第。

ご下問のあった「気ばらし」は、フランス語では夙にパスカルの語彙として聞こえ、畢生の著作『パンセ』の一章を割かれることにより、フランス精神の鍵を担う言葉でもあります。フランス人の、イタリア人と異なった意味での人生享受（享樂）的態度も、その顕れと云えなくもありません。仏語“divertissement”（デイヴェルティスマン）は、“divertir”という動詞を語根に持ち、そこにはっきりと伺われるように、もともと「（物事から）目を逸らす」意を語源としますが、パスカルの慧眼

はそこに「現実」からの逃避を見通したというわけです。

河北についてはいずれ話をする機会もあるでしょうが、局長氏、最近は自ら筆を執らぬところに問題がありそうです。もっとも彼、むしろ世の中を動かす仕組みの方に関心があるようですが（かつて、バングラデッシュ建国の当時、いち早くアブドラ・ラーマンとのインタビューを口にして小生を驚かせたものです）。

週末の登山、もしも尊師が駄目なようなら、無理にも一泊して池木屋をと考えております。 保野生

蓮川 大兄

99/03/25

さっそく懇切なメールを拝受、さすがベテランのお手並みに脱帽しました。

折から宮崎氏の深夜便（こちらはFAXです）があり、その後の考察によってわれわれの嫌疑が晴れたとの報せです。

氏の伝言を補う上でも、なかなか示唆にとんだ内容かと思考しますので、あえてその要所をお目にかかる次第です。 保野生

編集後記

長野県塩尻市出身の村上泉君は、大阪外大フランス語学科3年生だった昭和39年の5月、外大山岳部の春山合宿に参加。白馬から唐松へ縦走中の2日午後、不帰岳2峰信州側に滑落。翌3日、頸骨骨折などで死亡した。2年後の41年8月、山岳部の後輩たちが中心になって、遭難現場に慰霊のレリーフを建てた。刻まれた歌「さみしくも…」は母、東梅枝さんの作である。

泉君と一緒に山へ登っていた仲間も、顔も知らない先輩、後輩たちも折に触れて現場を訪れていたが、平成10年8月、10数人がまとまって唐松・不帰へ登山。レリーフを修理し、飲んで歌って、語り明かした。その時の話からこの冊子が生まれることになった。

東梅枝さんらは不幸の後、八方尾根から唐松、不帰へかけての一带を「泉の山」と呼んで来られた。その呼び名を、タイトルに使わせてもらった。

00.12.15 由良記

発行 大阪外国語大学山岳会関西支部

発行日 平成13年1月31日

事務局 京都市中京区衣棚通押小路上ル上妙覚寺町211 エラタム内

